

## ワークショップ「写真の技法識別と取り扱い・保存」に参加して

遠藤 楽子

この夏、八月五日から七日までの三日間、東京大学史料編纂所で開催されたワークショップ「写真の技法識別と取り扱い・保存」に参加した。写真を研究資料として、また博物館における文化財として扱う上での知識をじっくりと学ぶ機会となった。筆者は写真について専門的に学んだことはないものの、日ごろ、勤務する東京国立博物館の創立期の研究に取り組むにあたり、当時を知るための重要な研究史料として、幕末・明治初期に撮影された写真を中心とする古写真に価値を感じ、活用してきた。特に、二〇一六年度から一七年度にかけて東大史料編纂所一般共同研究「東京国立博物館所蔵湿板写真に関する基礎的研究」に参加し、当館所蔵のコロデオン湿板写真原板を史料編纂所古写真プロジェクト制作の高精細デジタルデータを通して考察し、さらにその後の研究においても、古写真の重要性がさらに増していることを認識しているところである。今回は、写真史料の保存にまつわる最新の状態や、デジタル化の時代における写真史料の現在について少しでもその全体を知りたいとの思いから、このワークショップに参加した。

一日目の講義においてまず再認識したが、写真史料のますます高まってくる文化財としての重要性和価値である。あるモノが文化財として法的に重要なものと位置づけられ、後世に向けて残していくための処置がなされていくうえでの根拠となり、支えとなるのが、国が行なっている文化財指定制度、とりわけ、国宝・重要文化財への指定制度であるといえるが、写真についても、近年歴史資料としてその価値が認知され、指定対象となるものが増えてきた。文化庁主任文化財調査官の地主智彦氏の講義では、その背景や現在までの状況について丁寧な解説がなされ、後世へ残していく文化財として

位置づけていくべき写真史料の価値を理解することができた。続く日本大学の高橋則英氏、修復家の白岩洋子氏の講義では、写真がどのような物質によって成り立っているかについて、そして写真技術の急速で多様な展開を学んだが、ここで印象に残ったのは、つまり写真に写っている画像というのは、紙に定着させた銀である、という物質的な観点からとらえた高橋講師による端的な説明であった。写真史料に接するとき、ガラス原板やネガフィルム、プリントなど、その数は時として膨大な量になり、かつ撮影者や被写体など、個人の思いも介在しうる、という要素から、写真にはほかの分野の作品とは違った側面があると筆者は感じてきた。しかし、高橋氏の解説のように物質として改めて写真を見直すという視点は、写真史料を文化財として客観視するときにもポイントとなると感じた。写真技術はこの銀を化学変化させたり、紙に定着させたり質感を調節したり、保存性を高めたりするために、日進月歩で発展し、アレンジがなされてきたのである。したがって、目の前の写真を取り扱ったり、保存のための処置をするにあたっては、技法を判別し、適切な取り扱いにつなげることが肝要であることがよく理解できた。

高橋氏や白岩氏の講義において説かれた写真にまつわる知識は高度に専門的であり、また、その保存や修復に関する研究は欧米を中心として進んでいることから、紹介された参考資料は英語の基本文献やウェブサイトが多かった。このような参考資料の存在は日ごろ写真を専門として学んでいなければ接する機会はほとんどないため、貴重な情報を得ることができた。実際に、筆者も受講後、ワークショップのなかで19世紀写真プリントを判別するための基本文献として紹介された文献を早速入手したところである。

二日目と三日目は白岩洋子氏の指導による実習が加わった(写真1)。写真の識別は実際に体験してみると思った以上に難しいものであった。白岩講師の概説を踏まえ、参加者で実際にプリントの技法判別に挑んでみたが、いにしへの写真家たちの試行錯誤で急速かつ多方向に写真技術は発展した、との説明どおり、顕微鏡を使ってやっと判別できるほど似通ったものもあった。組となった参加者とともに実物を観察し(写真2、3)、意見を交わし

ながら、ようやく答えにたどり着くことができ、また、学んだばかりの知識や、顕微鏡などのツールを使っても正解に至ることができない場合もあり、想像以上に写真や印刷にまつわる技法が多様性に富んでいることを実感した。そして、実際に判別しなければならぬ場面となったときには、厳密な判定は専門家でないとなかなか難しいだろうと感じた。しかし、さまざまな薬品や基材がかかわっているなかでも、やはり手がかりとしては、初日に学んだ共通項「写真の画像とはすなわち銀の粒子である」ということが重要なように思えた。他分野の文化財も多く扱う当館のような施設では、普段はなかなか古写真に特化して専用の資材や環境づくりに資源を投入することは難しいと思う。しかし、扱う相手を紙・ガラス・銀ととらえれば、ほかの文化財と共通して留意できることは多い。これに加え、原板・プリント双方について、直接触れるときに注意すべき特性、とくに水分に対しては他の文化財以上といえるほど敏感であることも併せて知ることができ、大きな収穫となった。ワークショップを通じて写真の特性とほかの文化財との共通点を両方考えることができたことは、筆者だけでなく参加者それぞれの館でも写真の保存活用の上で役立つであろう。

最後に、すぐに活用できる実際的な知識として参考になったのが、古写真



写真1



写真2



写真3

プロジェクト高山さやか氏によるデジタル撮影に関する講義であった。いわゆる「高精細撮影」の定義とその限界、それを踏まえて、プロのカメラマンでない我々研究者自身が資料撮影をする上で知っておくべきデジタルカメラやレンズの効果、デジタル時代における絞りなどに関する基礎知識は大いに有益であった。筆者自身が文系研究者であり数字に関する物事を不得意としているため、想定される場面に即してのかみ砕いた説明は非常に分かりやすかった。史料を扱う現場において、写真撮影を専門としない作品担当者や研究者が実際に古写真の状態記録等の撮影をする機会は多いと思うので、本編の講座で得た成果を踏まえてデジタル撮影の知識を活用できるのはとても有益であると感じた。

全国から集まった博物館の同僚たちと少数で学べたことも得難い機会であった。幕末明治初期を含む古写真を共通して所蔵する施設として互いを知ることができたことは、今後につながるネットワークの足掛かりとなったと思う。そして、今後もこのような講座を通して、古写真を資料としてだけでなく、社会の共通財産である文化財として保存していく重要性を知る博物館関係者が増えていくことを願う。

(東京国立博物館主任研究員／画像史料解析センター共同研究員)